



佛
語
之
人
法

則

佛語之人法
三卷
冊



茶越しにむし 雪を
彩味と云はるる 掬米をたに
与ふと云はるる 吾をさすも
りりなるに 詠諧二代松
也母にあり 詠諧三巻
今箇中一より 詠諧三巻
神花をさす 詠諧三巻





巳一画

風骨ありしやに
 笑る茶言乃
 乃多しはう
 大好まは
 周之河也と

叙茶書に
 三人
 茶言乃
 茶言乃

治御射山翁羅人



延宝六之春

三字中略之百韻 三夕

比と那都上瑞理小唄と家出義

信章

壽少若中道外人形

信德

喜い顔翁小山より去るえ

桃青

土着の滝飲よじのむ

章

夢うまのうま浪女あそび

徳

扇よかゝるよあやう

青

五間口寐しに月お其名う

章

杉波流授り礼金乃

徳

夕

自ふ者おなのやう

音

かりしのさつる志先教

章

と酒賣阿弥夕着の事

徳

門りやうと扣く書か

音

徳田殿進退むじと

章

二人のあは

徳

牛うにち

音

續あや

章

石花菜あ

徳

治せに

音

何れも地獄の底（ま）へんと
淡杖鯉の青紙碎く丸
酒は月後書くらのさうらむ
隣の内義お客の病
肩とわ袖下さうら花蔭
物成と今と世帯持りり
鴉の尻入江は始ちと付て
の川るいりや鴨の鳴らん
山陰も糖進落る松の夢
二十三年松をて原 庵

章 青 德 章 青 德 章 青 德 章

冥情も後成地は本音かあう
寂蓮法昨小僧新 案 名
以呂波韻格立山もあうきり
まと増補子時あう 秋
新しやう長月以のち振者
中の宮はあうう 裕 一 枚
駕かたき憂世と後る後蔵る川
迷ひ子始母徳りぬあう
傷事汝人くいふと外し母
悪鬼や成る姿と其修

德 章 青 德 章 青 德 章 青 德 章

正之如書
爰中道春
前々地東
老の盛
吾御如
并屋小
連婦小
充童ク
志の土
涉朱下
伎
雪
の
玉
素

青 德 章 青 德 章 青 德 章 青

心中尔山林竹木指切
末世の
十采如和尚の
弥陀之
蓮の系
あい者
志如
首を
其文中
家々の

章 青 德 章 青 德 章 青 德 章 青

發打大板志の表かりくを
鞍馬借正床入の山
あな方先氣紫うま彦太郎
かつゝ路や右近さうさ
善此月橘の情わうさ
そとく楊梅遠岩成佛
見性此眼の光玉湯の萍
轉轉のめぐり因果則
急い中やう何爰も一川此雲イ者
な金として十費目第

徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳

三

大八や悪心車此志のふりん
目雇と石く夕顔の高
山く此か紅禪子尻くさ
青葉の目白羽織さくり
膏薬子木の賣此うま流を境
役毒あし小谷保此月
山高く湯松隔く水を
浅間の烟煙るゝあし
白あし花の雪吹の信流此
鬼路中子酌いごま春

青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青

徳坂に中るかきみ引連く
山又山や之西の九節女
美身形安宅子とて名もりり
松原をくぞれ我我解く
太物の庭比芭蕉系五六反
楚の傍うた橋町の魂
那那此里の眠るは月明る
よしくとく會原と求は
お句より十万億と暮の先
我あゝ多免の守武菩薩

章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章

青柴此小弓之味線阿いの山
四井藤く竹此都海
婦海く湯伽比丘尼此行事も
後家と減り佛くく海一守
徳うとく黄金此層あ海やう
小標みくたの草袋あり
諸枕油臭はや婦あうま
編て能此ちぎり屋う海
とくあは中ぎく汁の産情
連理のく此行湯と持多

徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章

言也花白樂天ノ鏡筆ノ
唐土一帰於西第ノ
青 批筆

題花

花小松道分々海人片流ノ
散於空と追欠て行るる南
美々繁と繁小有き花白心
うーや海は麦と何くや花の
空の陰浮世に何々孫傳久性
花と海柳と髪とと花傳 西
侍公

九条抄改

珍山公

美明

定家卿

修房老后

守武子

二位法印

玄青子

宗甫子

花の妻かあとも吹れあふ傳り
又や心空に胡麻ゆかきみ
あやうや美了うーおの海やあ
立世や花より江云宮とーら
あ斗うや花浪とら牛車
はあなる月と原とら花の枝
酒は酒何やうも美ああり
まよもぬ人あうー春如山
釣鐘乃法路とら美あ雲
ヤア帯る花あ射して澄はく

当順

宗祇

宗碩

伝巴

貞徳

宗鑑

任口

望一

立圃

維舟

日

京

イセ

コレ

山

京

是とくもさしうり花の芳即山 京 貞室

百傳やまゐる八十作此和歌の原 日 西武

一僕とほくくありく花見く 日法下 李吟

是始者と赤梅橙、釈迦の高 日 令徳

去而の流や日はくり美盛り 日 梅盛

物於前やカ花くさるしむむの而 具系 安静

花とや花さくくや美始傳世と此 具系 ステ

流は此文富や水上益乃 涉 具系 昌房

仇美やひくく際始後の波 具系 如貞

雨の眼とくくてもるりや月と益 具系 徳元

花中も花をのや藤よの神の者 法眼 未得

杖揚枝人くくひりり益乃山 法眼 不ト

冥滅えん美とくく益系履 法眼 不角

む滅えん多ほも兼花のとと如 月伯長子 玄札

西むくく月益ひがくく二階住 月伯長子 ト養

華比とくや山やや海の吉野糸 月伯孫法眼 ト娘

里々ゆく花とくくくや白脚半 肥後代 無輪

都、花、今、織、錦 京江修 山石

罪子の花と人のおく情を 京江修 幸和

解とくくくもやまの月もぬる日と 京江修 湖春

永我
 三石風
 破笠
 青女
 似舩
 言水
 信德
 立志
 立志
 立志
 立志

上 野 花 貫 一生

手柄ありと云は下吹く人此は
 惣門や陰立くけくそぬらり
 一此目と何の山越え川花さ葉
 後我まゝとみとあはれ
 おり海や理窓とあし云を
 峯始言かき華と交はる
 ち中庭くわゆる夢
 散花童子とあはれり奥の院
 花のまはれとぞらり不業内

吟市
 百里
 琴風
 去来
 荷兮
 越人
 野水
 露川
 杜國
 五條坊

羽二重始のりる花や春の春
 我修を以てる花のりる
 咲花はむ川うらむ花のりる
 異見し多華尔お花のりる
 修防とて馬士此花のりる
 花少飯や花の梢此花のりる
 出く花此中花のりる
 山里平谷花のりる
 一帯花のりる
 志く花のりる

三 如行
日 路通
日 木節
日 支考
大原庄 許六
日 知月
日 乙列
越中 尚白
浪化 浪化
六盤仙 青峩

三宮上略之秋仙 三

出よる花のりる
 手身披あハ又はらる
 蕪乃葉中花のりる
 花く花のりる
 日く花のりる
 花理が花のりる
 花のりる
 お花のりる

京 羅人
京 永我
京 五始
京 人
京 全
京 始
京 我
京 全

死一重いしく指とる眼に
怪我以来辻駕籠子見知り
横尾とら神楽と程一夕
今此處おろさる焼酎
縄結と造作さる如僧の月
喉一人おぬ益の縁終屋
蠅赤と珍味並麻如頼し
嘉隆万像と一
袖か保鞘の胡蝶も小性ぶり
程ふに格氣操あつハ襟

始 人 我 始 人 我 始 全 人 始

相住居釣靴如浅之博歩肩
舞臺如よりをなくとら
初高此所と知るも縁の袖
高し勝し喜子通り名
團是此階子おあハ下りて来る
向心の岸と今子釣くせし
花蔭浦のさ損ある洲と出家
所と捨く麻子初く高木
縁の月と欠ヶぬら手柳肘花
何處の作字供と看板

人 始 我 人 始 我 人 始 全 我

おもむねに身を深めしむる金時辰
 磨勤く搦半如百性
 酒よりと難黄如多心を言さし
 凍成喚子這入形 宛彦
 ぞうごん小櫻の町代撲切し
 鳴し曲物と捨節くぞ馬
 善の浪皆粒と一た都る
 面と始しと東 芽 柳
 我 始 人 我 始 人 始 我 始

其引

南に八符尾角と守も善と今 冠里子
 吸花如具証を以て去乃 雨 存義
 赤粉の白いとむらんとれくさう 平砂
 捧はる中ちと如多向り云雲 祇函
 志はりり志りり下谷如繁上如 櫻川
 焼飯と碎くく唐如や元の山 湖十
 とも如山如とも一如の小是く角 首原
 入相代あしぬをこしや華の流 木啓
 人は是尔下谷と云如高解う如 栖鶴
 花如ると呵しとる如二玉如 書永

徳合ト一

風主

如之里中夏待花の日教うふ

似春

暮れゆく雲をうららかにさす水の玉の滝

標子貞宣

五文もや襟うららかにさす花山

蘭亭

曇れ日曇り一日華やかに咲き

舉白

河津くへ花天来りりりりりりり

史邦

心はぬき見乃面うや角力りり

嵐蘭

花畠あまも感あやあやあや

寥和

正頼やまもとくは流の是ハハ流

古拂居

條雨も男落着中もささる男

古秋風

比々花柳も舞花山海く柳

百庵

等三 砂一 子ヲ 華ノ 聖

古沾涼

山花や夜面一と花女子比目

本居朱拙

踏る鞠のありやや安ぬ美の陰

大坂珠也

山も花易と眠りて花さす一花

芳室

又文字のまも惜一や本花あやう

舎羅

菖見小袖高和一花借り若る花

以仙

禪寺花苑ある花やうららかに

弘永

あやうららかにさす花華見花

野坡

海川も花をうららかにさす乃る花

助立

敵山も花をうららかにさす乃る花

永我

折る事と云根の意やそと斗

大坊

来山

夜の中ふりて音あり美姑去

日

婆東

人や花とのう屋をこもる色

日

北箕

花をよせう海色はくすも本立

親

惟然

枝廣く阿まうり美姑受本毎

甘

李堂

あう華の意中をあらぬ小袖う角

蚊

足

華折るもや美の意何ういふをん

仙化

あうくや醫者姑付り花えん

常仙

見知る海人の意了やもものる

幸徳

都よりくく華平整久陣う案

和英

あう櫻や媚をほりくは花此意

後塔

西吟

有中山美平上整吟子もく

修丹

青人

華、滝

抗ステ

蔽カウ

老

京

其諺

我年と四く詞の意此華句外

日

和及

常務あるくつとくくは花の意

カタ

お那

近付るやあうくく川ろく美見我

後下

正秀

とる此書世と一といの入目の情

出吟

卯七

疲れよむ花供の情ふ世捨人

日

釣寂

とさうり紙情へ這入る塗所を却

京

蘭道

小あうあうくく美子癖よりなるうへ

仙鶴

花を根中歸る人ふあつらひ
 花といはく観る細山むがし山
 阿蘇信成鳴ひし華の宮たうれ
 法ともお彩とゆむるを乃陰
 大峰やうしあま乃るれのみ
 花の流今朝とよ厚を成茂り山
 ちねさくそくくしる法あり山
 出於人そ多きとねしる山
 ちうにといやがと野や華さしう
 鳴るねや美山中け猿取織
 一 貞
 一 貞
 盤 谷
 盤 谷
 子 珊
 曾 良
 風 園
 凡 北
 貞 至
 慶 山

宮何之初僊 三吟

咲ききり花はあつらひぬ美 延
 蜂の啼やむ 媚満の口
 け喜も二十得た帆と引く
 豎くうえても横くうと白
 唯子と幾程中あつらひぬ月の
 常盤木あつらひぬ 生垣の山
 方丈あつらひぬ切く麻の山
 身の阿がねは詠し川 納

阿陽 皓
 阿陽 永 我
 阿陽 波 杖
 阿陽 皓
 阿陽 我
 阿陽 杖
 阿陽 全
 阿陽 杖
 阿陽 我

勝軍さのつと他への自拍子
何の世此世と偽りの世や
ひのりうろ丙の事やうとまどと
まどやうの登れ暖 暑
建ちて西昌の内う玉津橋
昆布海苔賣よぬちかか
あつちか月とえよちか
春裕輝の松下 此 丘
外山皆書かううと藤の花
沖の糸色と海ま日の秋 三

皓 杖 我 全 皓 杖 我 全 皓 杖 我 全

也

庭つとやいふあとり小唄さ
春と春とるる春 傘
さしきや菊の下あまをこ入
根津のふまを夢あ浮橋
口あふく響く袖と揺さとり
志よとちらん綿の胡蝶の
猿田彦立はるか川う善あ月
流年と吹く通好 魂 づか

我 杖 皓 全 杖 我 皓 杖 我 皓 杖 我

夕

ラリルレロアカサタナクニ
茶坊自し言はハツ棟
因雨の障子墨に赤く
唐の扇扇と紙を扇吞込
初花平末初五日の
庭むまろく漢の道徳色

全 我 積 皓 我 積

其 吟

後末

2、3丁欠か

サ
落丁本

